

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 7年11月15日
(150号)

中之島ニュース

[事務局] 〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
事務局 古田修平
編集長 西村俊幸



■『理想の教師像』との出会い
周英先生（十月度特別講義より）

高校は病気のために卒業まで五年かかり、大学へ進学、卒業した時は就職氷河期でした。が、教員採用試験を受け、国語の教員として大阪の中学校に赴任しました。その五年後に親たちの体調や父を亡くしたこともあり、和歌山に戻り小学校の教師になりました。その子どもたちのエネルギーの凄さにたちまち圧倒され戸惑いました。プライベートでは結婚話が破談になるなど、公私ともに心境はどん底を味わっていました。当時学校には宿直の泊まりの制度があり、あるときその当番となりました。たまたまその宿直室にあつたのが森信三先生の『理想の教師像』でした。その本は自分が小学校の教育で悩んでいたことを手に取るように教えてくれ、感激しました。感激のあまり、便せん七枚に感想を書いて本に記載された森信三先生の宛名に送りました。しかし、しばらくするとその手紙は返送されてきたため、おそらく著者はもう亡くなられているのだろうと諦め、本に書いてある、ゴミを捨うことや、満面の笑みで子どもたちを迎えることなど、実践していこうと試みました。また一日一人良いところを書いて渡すこと、学級通信「ひろば」も毎日発行するようにしました。

この学園の生徒F君は規則の厳しさに耐えられず、母親に宛てて「この学校のような規則正しい生き方は嫌だ、家から通学できるところに転校させてください。それを許してください」と手紙を書きまして。それもいけないというなら大阪に出て働きます」と手紙を書きました。母親なら死ぬと言われたら飛んで迎えに来るものが普通だろうが、F君の母親は「あなたは意志が弱い、悪友の誘いを断れるのか。なぜ悪い方へ後戻りしようとするのか。もともとのわがままな怠け者の弱いあなたを見るのは身を切られるより辛い。あなたが死んだら、母親の私も即刻命を絶ちます」。この命を賭

その後森先生と一緒にさまたな研修でいろいろな所に参りましたが、とりわけ三重県の日生学園は全寮制で、全国から事情のあるぐれた生徒ばかりが集まっているところでした。規則はたいへん厳しく、「晨行」という名の清掃を行い、校舎や講堂の床を磨きます。青田校長が率先してものすごいスピードと力で磨き上げるため、高校生の生徒も倒れる者が出るほどでした。青田校長は夏休み中も家に帰らず生徒の指導をされ、「太陽に日曜日はあるか」と話されました。また、私たち教師がだらだら歩いている姿を見て「それでも教師か！全力で歩きなさい！」と一喝されま

のを効率的に供給する
験の提供（得意な分
し、コミュニティ全
となつてきます。こ
ないものの価値が中
にあるのが波動です
い波動。これから
を高め、自分の資質
調和して生きること
社会となつていきま
築いていきましょ

調和がテーマになります。情報や知識の流れが加速し、テクノロジーが社会の基盤を変え、競争から分かち合いが求められ、一人一人の資質や個性が尊重される新しい社会が形成されつつあります。変化する時代を理解し、行動に移すこと。新たな価値観が求められる時代を一人一人が自覚と責任を持って生きることです。分かち合いの実践するためには、●情報の共有（SNS、ブログ、オンライン、プラットホームを活用し自分の知識や経験を発信）●人脈の拡大と橋渡し（有益な人脈を他者と共有し互いを支え合う信頼と協力のネットワーク）●物やリソースの共有（必要なも

■縁に導かれて
あるとき、法政大学の古田拡先生の講義を聴く機会に、初めて出会った林田勝四郎先生のご縁から森信三先生につながり、お目にかかるようになりました。ずっとお会いしたいと願っていた森先生に初めてお会いできたとき、「旧姓の」「岡村周英」の名刺を渡すと、先生は『真宗大辞典』の岡村周薩に名前が似ている、と身内の名を口にされ、本当に驚きました。「人間は一生のうち逢うべき人に必ず会える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎないときに」の先生の語録通りの実体験でありました。

人間学塾・中之島 10月読書会

今期は、読書会のテキストを「一語一会」に一本化しました。2グループで読書会を開催。

A グループは、指導:近藤宏枝世話人、進行:中川千都子代表

B グループは、指導:田中檀子塾生、進行:西村俊幸世話人



A グループ



B グループ

一語一会 若き学徒のために 十月 より

十月十一日

いやしくもわが身の上に起こる事柄は、そのすべてがこの私にとっては絶対必然であると共に、またこの私にとっては、最善なはずです。それ故われわれは、それに対して一切これを拒まず、一切これを却けず、素直にその一切を受け入れて、それに隠れている神の意志を読み取らねばならぬわけです。

十月十四日

「朝のあいさつ人より先に!!」これを一生づけること。自分の地位が上がっても、後輩に対しても先にするように。

十月十八日

夫婦のうち人間としてエライほうが、相手をコトバによって直そうとしないで、相手の不完全さをそのまま黙って背負ってゆく。夫婦関係というものは、結局どちらかが、こうした心の態度を確立する外ないようですね。

○今生最期の心願

わが亡き後に、心通う同志の三名にても、書を読まむ集いだにあらば、姿なき身にてあれど、希くば予もまた、その一末席に列することを、許されことをこれわが今生最期唯一の「心願」なり



また京都ちおん舎読書会では、これまで周年記念会の他に50回を50名程の参加者で、100回を第7回合同読書会と合わせて100名以上の参加者で、寺田一清先生がご逝去された直後でコロナ禍でもあつた150回を除いて、酒席も交えてどれも盛會で大変賑やかに行つてまいりました。

しかし今回は、全一庵で開催することを優先して、参加定員を十五名としたところ、一二十歳代から八十歳代の文字通りの老若男女が揃い、厳かで意義のある記念会となりました。そして今回、これまでの振り返りとして「記念誌」を作成いたしました。表紙には、四年前の一五〇回記念会の集合写真を掲載しました。そこには、当塾の卒塾生の前田聰・知美夫妻とその子供たちが写っています。その子たちの為にも、三〇〇回、四〇〇回と継続させていかなければならぬないと考えていました。(記念誌は希望される方にお渡ししています)

(石黒尚世話人)

京都ちおん舎読書会200回記念会

塾生だより

「神(じん)」をみると「う」と

おかげさまで150号

平成24年の創刊以来、
今号で中之島ニュース
は150号となりました。
本誌では皆様の活動
報告を掲載してまいり
ます。

皆様からのレポートをお待ちしています。

2012nakanoshima@gmail.com



◇懇親会 2階 アゴーラ

◆記念イベント
・みんなで「コーザス」
・「歓喜の共鳴」
・中之島新喜劇
・「奇跡の森はどこに」
・中之島落語会

特別ゲスト 三代目 露の五郎師匠

福岡県生まれ。平成9年3月、露の五郎（後の二代目露の五郎）に入門。
本年（令和7年）10月、三代目露の五郎を襲名。

志ネットワーク代表。
松下政経塾元塾頭。

次月案内

新刊紹介

のち、燐燐と
虹天塾近江講演録 第三集いのち編

人生で大切なことを気づかせてくれる16の物語
虹天塾での講話者の講話録です。

※中川千都子代表、伊勢の中山緑先生の講話も収録されています。

金額1,500円(税別)



申込はQRコードより

編集後記
まいよいよ第14期が本格的に始まりました。まずは、浅井周英先生のご講演から。一教員から森信三先生に逢い、実践を重ねられ、「和歌山市の教育長・助役として『実践の人間』の理事長まで務められました。ひとことひとことがとても深く、感動のご講演でした。

私は事で恐縮なのですが、浅井先生の教円幼稚園へは、仕事の関係で何度もお伺いさせていただきました。とてもすばらしい幼稚園です。また、浅井先生には、何度か崖城読書会にもお越しいただけました。

講座当日、来られた時にお目にかかりました。覚えてくれているだろうか?と想い、お久しぶりです」と挨拶すると、握手をして頂きました。それは、頑張れよの意味がこもつていていました。感動・感謝・歓喜でした。

さて、高市早苗内閣総理大臣が誕生しました。大きな変化の予感がします。女性初の総理。中川千都子代表も女性初の代表。通じるものを感じます。